［科目区分］：教育実践高度化専攻　リーダーシップ開発コース・教育実践開発コース
［授業科目名］：信頼を構築する学校危機管理
［登録学生数］：８名

令和元年度「授業評価・授業研究報告」

教育学専攻科　山内　孔

１　授業概要

本授業は、教育実践高度化専攻の１回生を対象とした専攻共通基礎科目である。県内の公立小中高等学校に勤務する現職の教職大学院生を対象としており、実践的な学校危機管理能力の育成を目指すものである。より良い学校とは、教師と児童・生徒、教職員同士、教師と保護者や地域住民相互の人間関係の上に成り立っている。その相互関係の信頼関係を構築することのできる能力は、スクールリーダーの資質、能力として、欠かせないものである。

学校における信頼構築を、学校危機管理という「防御」面と、保護者関係マネジメントという「攻勢」面から理解し、それぞれについて計画を策定する能力の育成を図ることの２点から考えた。すなわち、「リスクマネジメント」＝事前の危機回避、「クライシスマネジメント」＝初期対応、二次被害の回避について、学校現場の具体的な事例を題材にして、それぞれのマネジメント能力の育成を図ることを目的とした。

２　到達目標

本授業の到達目標は、①スクールリーダーとして必要な学校危機管理の知識を理解するとともに、学校危機管理計画を作成することができる。②スクールリーダーとして必要な保護者関係マネジメントの知識を理解するとともに、学校の信頼構築戦略を計画することができる。の２点である。

３　授業内容

授業内容は、理論面からのアプローチとして、学校危機管理の基本、信頼されるリーダーとしての対応等を講義形式で学んだ後、具体的な事例を取り上げ、その対応方法、改善点等をディスカッションにおいて検証することを中心とした。具体的な事例として、児童生徒の問題行動への対応、教員のわいせつ不祥事への対応、食物アレルギー等学校事故への対応、不祥事発生時の関係機関との連携した対応、いじめ事例への対応、指導力不足教員への対応などを掲げ、学校現場の校長先生等をゲストティーチャーとして招聘し、現場経験者ならではの実践的な事例について学ぶことを計画した。また、後半には、受講生が、学校現場出身であり、経験値があることを踏まえ、自分の経験した学校危機管理に関する事例発表を行い、その対応について吟味するという学びの時間も設定した。そして、最後のまとめの活動のとして、学校現場の危機に関して学校として緊急記者会見を実施するというロールプレイングを実施し、クライシスマネジメント能力の育成を図ることとした。

４　授業形態

授業形態は、最新の学術成果に関して、講義形式で学ぶ機会と、学校現場で実際に起こった危機管理の場面を題材にして、これまでの知見を活用したディスカッションによる検証の機会を設定した。さらに、自分の経験した事例の発表、それに関する質疑応答、講義の最後にはロールプレイングの機会も設定した。

５　緊急記者会見ロールプレイング

授業のまとめとして、学校に起こった危機に対して、記者会見を行うというロールプレイングを行った。このまとめの時間を取り上げ、授業の成果の検証を行いたい。

この時間は、それまでの事例研究の講義、検証を通して得た、リスクマネジメントに関する知識、技能を生かし、起こってしまった事例に対してどう対応するのか、クライシスマネジメントとして緊急記者会見の場を設定することとした。緊急記者会見に関しては、緊急記者会見のポイント、緊急記者会見の注意点、席順の考え方、会場設営、司会者の立ち位置と役割、登壇者の服装、入退場の方法、礼の仕方（角度、静止時間）、ポジショ

ンペーパーの作成、謝罪文の書き方と読み方、質疑応答の方法などを講義形式で学んだ。これを生かして、学校側４名、マスコミ側４名に分かれてロールプレイを一度行った。今回発生した学校危機の概要は次の通りである。

（事例概要）中学校での体育祭の予行演習時、２年Ａ男は 800m 走に出場し、午前の競技ではトップでゴールした。午後０時頃、昼食が始まろうとしていた教室でＡ男が倒れた。担任は教室にはいなかった。生徒が、先生を呼びに走り、教頭、担任、養護教諭、学年主任が教室に駆けつけた。養護教諭がＡ男に呼びかけたが反応はなかった。学年主任が職員室に戻り救急通報したのは午後０時 20 分頃。午後０時 25 分頃、AED を持った学年主任が校長と一緒に教室に戻った。AED を使って心肺蘇生を試みたが、心肺停止状態だった。午後０時 45 分、病院に搬送されたが、翌日の午後９時、死亡した。Ａ男の両親は学校に対し、学校側の対応によっては最悪の事態は避けられたのではないかとの思いから、市教委に対し検証委員会の設置を求めるとともに、その旨を説明する記者会見を開いたことから、学校にも取材が殺到し、緊急記者会見を開くこととした。

ロールプレイの検証の視点；１問題点の把握はできたか、２公表方針は適切であったか、３ポジションペーパーの内容は適切であったか、４発表内容は意図した通りに伝わったか、５想定質問は効果的であったか、６記者の質問に冷静に回答できたか、７学校に対する信頼を構築するものになっていたかの７つの観点を示し、ＶＴＲで緊急記者会見を振り返りながら検証を行った。

以下受講生のレポートより記述を示す。Ａ「記者になるべく言葉を発しないことが重要であった。話せば話すほど突っ込まれる案件が増えるだけであった、実際に陥りそうな状況を知ることができた。」Ｂ「記者会見を今までＴＶ等で見ることは多かったが、会見する立場は新鮮であった。特に学校側として考えた時に、このような場面での校長の責任の重さを実感した。正しい情報をしっかり把握して記者会見に臨む必要がある。また、記者の後ろにいる保護者（世論）を意識した誠実な対応が求められると実感した。」Ｃ「会見では学校としての責任を果たした点と、反省すべき点を事前に書いて整理しておくことが重要だと感じた。実際にこのような事案が起こった時には、それぞれの動きを把握しておくために、当日の動きの現場検証をしておくことも大事だと感じた」Ｄ「事実が報道されるのではなく、報道されたことが事実になるということには驚かされた。事前の記者会見の打ち合わせの時も一番気を遣ったのがどのような言葉を用いるかである。相手がどんな印象を受けるのか、多くの人が納得してくれる表現かなどである。実際にやってみると、言葉だけでなく、目線は大丈夫か、体の向きや姿勢はどのように見えているのか、などとても疲れた。何とも言えない緊張感は体験でしか味わえないと思った。本当に貴重な経験となった。」

レポートからは、それまでに学んだ学校危機管理に関する知識、技能を生かし、今回の事例に対してまず、学校としてどう対応するのかクライシスマネジメント能力を生かした対応策の重要性を学んだことが伺える。実際に受講生は授業に備えて自分たちで対応について自主的に集まって協議をしており、基本姿勢をどうするのか、何が問題点で何を謝罪するのか、何が改善点でどのように対応策をとるのか整理して、授業に臨んでいた。更に事前準備だけでなく、当日の対応の重要性についても、実際にロールプレイングをしたからこそ学んだことが多かったことが伺える。目線や表情、テーブルの下から覗く足の動き

でさえ記者会見の印象を変えるものとなることを実感していた。緊張感は体験でしか味合うことができないというレポートも実践的な学びの場になったことの表れであろう。

６　地域社会を核とした教育と研究のつながりについて

本授業は、理論と実践の往還を目指して、最新の理論と具体的な事例を取り上げ、ディスカッション等を通して、学ぶこととしてきた。具体的な事例については、地域社会で起こってきた問題を取り上げたり、学校や家庭で起きた学校危機管理に関する問題を地域や関係機関と連携して解決に取り組んだりした事例も多く見られた。もとより、学校危機管理に関する問題において、地域は欠かせない存在であり、現職の教員である受講生が、今後学校現場において、今回の学びを実践に生かすことを意図して授業をデザインすることが大切である。効果的な授業構成について今後とも工夫していきたい。

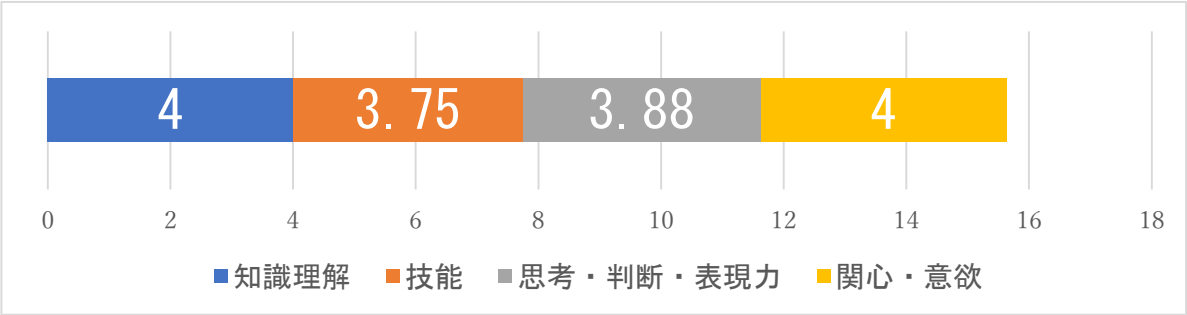
７　今後の課題

本年度の取組を踏まえ、次年度以降の検討課題として、つぎの３点を挙げることができる。

１点目は、**<グラフ１>**に見られるように、興味関心意欲、知識理解の項目の評価が満点であるものの、技能、思考力の項目の評価が、比較的高いが他の２項目に比べると満足度でやや劣っていることから、この項目についての学びを充実させることの必要性である。実践的な内容を取り入れ、学校現場で生かすことのできる知識は得たものの、最後の緊急記者会見のような実践に生かす思考力、判断力、技能についてもっと学びたいという要望があるものと思われる。今回のような学びの系譜の中で、最後の実践的な緊急記者会見のような体験の場をもっと豊富に設けるニーズがあるように思う。記者と学校の立場を逆転させたり、教育委員会の立場に立った記者会見を実施したりするなど、技能、思考力、判断力を育成する機会を豊富に設ける工夫をしたい。

２点目は、危機管理に関して、どのように対応したかの成功事例、失敗事例から学ぶことが多いが、今回、外部講師を招聘し、生徒指導上の危機管理、いじめ、教職員の不祥事、食中毒、指導力不足教員などの事例の取り上げ方が、やや生徒指導上の学校危機に関する内容に偏っていたことである。学校を取り巻く問題が複雑かつ広範囲に及ぶ現代においは、全く新しい視点からのアプローチが必要になるのではないだろうか。古くから学校現場で対応してきた学校危機管理事例だけでなく、あらたな教材開発に取り組む必要性を感じた。

３点目として、受講生の関心意欲を高める工夫の必要性についてである。受講生の自発的な学びを誘発する対策として、自己の学校危機管理に関する事例の発表及びその対応の検討の機会を設けたが、予想していた以上に深く、広く、効果的な学びの場になった。受講生の関心意欲の向上はもとより、想定外の学校危機管理に関する事例が提案され、大変有意義な時間となった。現職の教員である受講生であることを考慮し、このような学びの機会の充実について検討したい。

<グラフ１>教職大学院ＤＰ対応授業評価結果

信頼を構築する学校危機管理（4 件法４：かなり達成　３：やや達成　２：あまり　１：全く）